



赤い瓦葺き屋根の商家と玉川 沿いの白壁土蔵群

石州棧瓦葺きの赤い屋根が連なる打吹玉川地区。真向かいの山が打吹山である。



[歩いて・見た・歴史の家並み]-②

うつぶき

倉吉市 打吹玉川

(鳥取県)



商家の軒の出桁を支える海老状に曲がった腕木には彫刻が施されている。



歴史を偲ばせる本町通りの伝建保存地区の一角。真夏の陽差しが厳しく、暑い。

暑い夏。倉吉市の打吹玉川地区(平成10年に国の重要伝統的建造物群保存地区(以下、伝建保存地区)に選定)を歩いた。風のない日で熱気がねっとりとして身体を包み、汗が吹き出す。垣根を彩る朝顔の花を揺らす微風さえなく、玉川を涼やかに泳ぐ錦鯉が羨ましくなるほどだ。

倉吉市のランドマークといえる打吹山(標高204m)の北麓に広がる市街地の一部が打吹玉川地区である。市街地は天正年間(1573~1592年)、打吹山に築かれた城の城下町が原型になったとされる。江戸時代には鳥取藩家老、荒尾氏が治める陣屋町として整備されて発展し、木綿や脱穀道具などを扱う商業の町として繁栄した。繁栄は明治から大正時代にかけてまで続いたという。

その中心が、東西に長い市街地を貫く本町通りである。両側に建ち並ぶ商家と、商家の裏側を流れる玉川沿い(通称、川端)の土蔵群に往時の面影が強く残っている。

伝建保存地区の商家は、間口より奥行きが深い短冊型の敷地に、主屋や付属屋、中庭、土蔵などが配置されている。主屋は店舗併用住宅で2階建てが多く、軒の出桁を海老状に曲がった腕木で支えているのが特徴だ。腕木に施されたさまざまな彫刻が、往時の繁栄をしのばせている。

土蔵は、外壁の腰回りが杉焼き板の縦目張り、上方が漆喰壁。土蔵の木戸口には、ゆるやかな反りのある一枚石の石橋が架けられており、一層の風情を醸し出している。

商家の主屋も土蔵も、屋根の瓦が赤系統の石州棧瓦で葺かれており、赤い瓦葺き屋根の連なりが夏の陽に映えていた。

明治9年(1876年)の創業という桑田醤油醸造場にお邪魔した。

主屋は連続する3棟の建物から成り、このうち東側の1棟は大正4年(1915年)の建築とされている。しかも、地元の大工を京都に派遣し、修業させてから建築したと伝えられる純京風建築の商家だ。万事に贅を尽くした造りで、幅1間ほどの“通り庭”が設けられている。店先から中庭に抜けられる通路で、蔵などの荷物の往来に利用されている。微かに醤油の香りが漂うその“通り庭”を、一瞬、爽やかな微風が吹き抜けた。汗が少し引いた。

伝建保存地区内の古い蔵などを改装してみやげ物などを売る店を赤瓦といい、およそ10館ある。その1号館は、大正時代に建てられた醤油の巨大な仕込み蔵を改造したものとか。屋根を支える構造が、天井の梁と束柱(短い柱)を格子状に組み合わせた五重構造の和小屋造りで組まれている。日本の伝統様式が活かされたみごとな一例である。

この街は“福の神にあえる街”でもある。というのも、40店近くの店頭にも木彫りの弁財天や大黒天などの像が安置されており、像をさすると幸運に恵まれるというのだ。京都で修業した仏師たちの創作だという。

歴史をしのばせる建物を巡りながら、“福の神”のご利益にあやかってみるのも一興である。

玉川沿い(通称、川端)の白壁土蔵群。木戸口に架けられたゆるやかな反りを持つ一枚石の石橋が、独特の景観に一層の風情を添えている。

- ① 桑田醤油醸造場の主屋の“通り庭”。店先から荷物などを持って蔵のある中庭に抜けられる。
- ② 同主屋の畳廊下。地元の大工を京都で修業させてから建築したと伝えられている純京風建築の贅沢な造りを示す一例である。
- ③ 桑田醤油醸造場の外観。右手奥が主屋。



赤瓦1号館(醤油仕込蔵)の天井は、和小屋造りという伝統的な様式で組まれている。

こうした木彫りの“福の神にあえる街”でもある。写真はさすり大黒。

